

探訪 北の風景 ⑮

無料循環バス「まりむ号」 入湯税値上げでまちづくり

阿寒湖温泉(釧路市)

青木和弘

夏を迎え道東の阿寒国立公園は本格的な観光シーズンを迎えた。その中心地の一つ、阿寒湖温泉に、4月1日から、無料循環バス「まりむ号」が運行を始めた。35人乗りで、緑色のボディはマリモとアイヌ文様をあしらったデザインだ。「まりむ」とは阿寒湖温泉公認キャラクターの「まりむちゃん」にちなんだものだという。

観光客はもちろん、小中学生の通学利用以外は住民も乗車でき、朝6時から夜9時半まで1時間に1、2回の頻度で運行している。各停留所に時刻表が掲示されているから分かりやすい。

湖畔居住区の西端にある阿寒湖中学校や若草団地から、東端の阿寒湖畔エコミュージアムセン

ターまでの約2キロメートルを、湖畔のホテル街と国道240号・241号(複合区間)を縦横に巡回する。観光客が訪れる温泉街は東西1.1キロほどの範囲で、西側にはアイヌコタンやアイヌシアター・イコロ。東側には観光案内所や研修施設のある「阿寒湖まりむ館」、阿寒湖畔エコミュージアムセンター、「ほつけ」への遊歩道の入り口もある。端から端まで夏季なら徒歩12分程度の距離だが、真ん中あたりに森があつてホテル街が二分されているから夜などは心細いし、幼児や高齢者にはちよつときつい距離だ。

滞在型リゾートを目指す阿寒湖温泉にとって、飲酒後や車を持たない旅客の足の確保が課題だった。スキー場や、紅葉の美しい滝見橋などへもシーズンに合わせて停留所を追加する予定だという。まりむ号を運行するのは、2005年設立のNPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構(大西雅之理事長)で、「住んでよし、訪れてよし」の

観光まちづくりを目指し、地域でできることは何かを、観光事業者だけでなく、住民や中学生とともにワークショップを開催して議論してきた。

①夕方4時に到着し、翌朝9時までに出発する団体・周遊拠点型温泉観光地になっている②定住を希望する住民は25%にすぎない③阿寒湖の自然の魅力を観光客が十分に楽しんでいない④先住民アイヌの文化を伝えるアイヌコタンをもっと活かしたい——などの問題が浮き彫りになった。



30軒ほどの民芸品店などが建ち並ぶ阿寒湖アイヌコタン

では解決策は何か。①滞在型温泉観光地への変革で魅力的な自然景観と町並みを有する温泉街づくり②生活者の視点で住んでいて楽しい観光まちづくりのため女性グループなどが参加する活動③まりも再生を通じたエコツーリズムへ自然を楽しむ体験プログラムの充実と発信④アイヌ文化を学ぶ体験プログラムとアイヌシアター・イコロの開設——に取り組むこととした(アイヌシアター・イコロは2011年に新設された)。

問題は財源だった。同機構は、独自財源確保のため入湯税の値上げを釧路市に要請。2015年度から10年間、国際観光ホテル整備法の登録旅館・ホテルに宿泊する一般客の入湯税を現行の1人1泊150円から250円に引き上げることが





阿寒湖温泉街で運行が始まった無料循環バス「まりむ号」



アイヌコタンに近いホテル街にある土産物店街

決まった。現在対象になるのは阿寒湖温泉の4施設で、年4800万円、10年間で約5億円の税収増を見込む。

同機構は、阿寒湖温泉観光振興策として①まりも家族バス「まりむ号」の運行②おもてなし事業の「家族コイン」の製作③WiFiの整備④温泉街のサイン類の整備——を行うことにし、釧路市に補助金を申請。2015年度は2120万円が予算化された。入湯税の値上げ分を積み立てた基金の中から最終的に充当することになる。

阿寒湖は天然記念物のマリモヤ、特産のワカサギやヒメマス。周辺には摩周湖や屈斜路湖、雌阿寒岳とオンネトー、釧路湿原があり、タンチョウも見ることが出来る観光資源の宝庫である。まちをあげての取り組みに注目していきたい。